スポーツ環境及び高校入試制度の在り方検証委員会　第１回会議　（概要）

１　日　時　令和７年７月３０日（水）１０：００～１２：００

２　場　所　秋田県庁第二庁舎８階　公営企業課分室

３　出席者　検証委員会委員　１９名（１名欠席）

４　議　題
・県外進学の現状及び現行の高校入試制度について
・県外進学に影響を与えている要因等について

５　協議における委員からの主な意見

〇県外進学と入試制度の関連性について
・特色選抜が県外進学の主な原因であるという意見は多数派ではない。
・入試制度が県外進学に直接結びついているとは考えていない。
・以前から有力選手の県外への進学は見られており、入試制度の変更が主因ではない。
・県外への進学は、入試制度よりも県外私学からの誘いが主な要因であると考えている。制度がどうなっても一定数の選手は県外へ進学するのではないか。
・現行制度を元に戻したとしても、県内に残る生徒が劇的に増えるとは考えにくい。
・入試制度と進路選択の関連性は薄く、生徒は魅力のある場所を選ぶ傾向が強い。
・特色選抜を導入したことが、生徒の県外進学の主要因であるかについては、生徒からのデータや声がないため断定できない。
・県外進学は入試制度だけでなく、人口減少、少子化、競技力低下など多岐にわたる問題が絡んでいる。何か改善できることがあるはずだ。

〇県外進学の主な要因について
＜県外私立高校＞
・私立高校の接触時期が早い。県外の私立高校では中学２年生の段階から声かけを行うこともある。中学３年生の５月時点では相当数の勧誘が直接行われている。
・入学金や授業料の免除、特待生制度、寮費・施設費への金銭的な補助などが保護者にとって魅力的である。授業料無償化により、私立高校への進学が増加することも考えられる。
・指導者の継続性や設備・施設が充実していることに加え、就職や進学のサポートが手厚いことも私立の特徴である。競技レベルの高さが高いだけでなく、大学・社会人・プロへの繋がりを持つ環境が整っている。
・スポーツ環境の良さや経済面、生活環境の魅力を見れば、私立高校に進学するのは自然な流れとも言える。
・タブレットでの学校説明、画像による育成方針の説明などの豊富な情報に基づいた熱心で分かりやすい広報活動を行っている。

＜県内公立高校＞

・県内公立高校では、中学校に対して声をかけることができる時期に一定のルールがある。県外の私立高校は早くから声をかけており、県内公立高校が声をかける時期には生徒の意思決定が済んでいる状況がある。また、県内公立高校では生徒や保護者への直接的な声かけが制限されており、熱意が伝わりにくいように思う。この状況を改善することが必要ではないか。

・県内に、全国レベルの魅力的な指導者や学校が減少している。関東圏の大学や社会人で実績を上げた指導者が、秋田県での就職を断念し首都圏などの学校に就職している事例がある。

・遠征費の確保が難しい家庭への支援体制がなく、経済的支援の欠如も県外進学の要因ではないか。

・少子化も県外進学の顕著な要因ではないか。少子化により部員数がぎりぎりのチーム状況だと、中学生がスポーツに打ち込む環境として魅力的でなくなる可能性がある。

・特色選抜の本来の趣旨が「全国大会で活躍できるスポーツに関する特色を持った中学生の選抜」から、「部員数の確保」が目的となっている傾向がある。

＜生徒・保護者＞

・県外進学の主な要因は子どもの意思であり、県内に希望する高校がなかったためと捉えるのが妥当である。

・指導者、施設、補助金、生活支援、寮などの「人・物・金」といった魅力的な要素に惹かれて県外の学校を選んでいると推測される。公立高校における「人・物・金」の充実を図っていただきたい。

・「インターハイに行きたい」といった具体的な目標や、強豪校の魅力、良い指導者の存在がモチベーションとなっている。

・生徒たちはスマートフォンで情報を収集し、自ら県外の指導者や環境を求めて進学する傾向がある。特に、ＳＮＳの普及により、生徒や保護者が多くの情報を持つようになっており、見えないつながりが増えている。

・保護者も子どもの意思を尊重し、県外進学に協力的である。

〇高校入試制度について

＜前期選抜（旧制度）＞

・早期に合否が判明し、不合格でも一般選抜や私立を選択することができた。

・早期合格により、高校での競技開始に向けた準備を余裕を持って行うことができた。

・学力だけでなく部活動での成果など総合的に評価された。

・前期選抜がある方が、子どもが自身の進路をじっくり考える時間的余裕があった。

・前期選抜が３教科で、高校入学後の学びに影響するということであれば、５教科とすれば良いのではないか。

・前期選抜合格者と３月に受検を控える生徒が同じ教室で学習することによる指導上の困難があるならば、私立高校に進学を決めた生徒が教室にいる時点でこの論理は成り立たないのではないか。

＜特色選抜（現行制度）＞

・一般選抜と同日実施のため、制度についての保護者への説明が難しかった。
・大学入試の時期が早まっているにもかかわらず、公立高校入試は３月に一本化している点には違和感がある。
・不合格の場合、２次募集に回らなければならず、希望校を選べないリスクがある。秋田市を中心とする中央地区では２次募集を実施しない高校が多いため、不合格のリスクを考えて特色選抜に出願しにくい傾向がある。
・１月の前期選抜がなくなり３月の一発勝負になったことで、２次募集を避け、県外私立高校に進学するケースもある。
・受検生や保護者にとって、３月中旬まで進学先が未定である状況は非常に不安定で心理的負担が大きいのではないか。合格発表が卒業式後になるのは全国的に珍しいと考えており、早期化することで生徒の精神的負担が軽減される。
・多くの生徒が公立高校入試を目指すため、現在の制度は、中学生活を最後までしっかりと送る上で大きな意味を持つ。
・現行の制度は、長期にわたる教員の負担を解消し、働き方改革にも一定の効果があったのではないかと思う。

〇県内高校の魅力向上と対策について

・秋田県内にどれだけスポーツの魅力的な場所や良い環境を作れるかが課題である。
・中学生が「あの高校でスポーツを頑張りたい」と思える高校が減少している現状を危惧している。県内の高校の魅力向上が最も重要である。
・魅力的な指導者、設備、環境等についての情報発信を迅速に行うべきである。
・県外から県内に来てもらう人を増やす政策も強化すべきである。
・スポーツに秀でた子どもたちを救うような制度設計の在り方についても、改めて議論する必要があるのではないか。

〇今後について

・客観的なデータに基づく検討・検証が必要である。
・県内外への進学状況における公私立の割合や東北６県の公立高校入試日程との比較などを含めたデータ検証が必要である。
・子どもたちの声が見えていない中で、制度変更の結論に至るべきではないのではないか。
・関係機関との連携を強化し、入試制度や競技力向上など各分野での具体的な検討を進めるべきである。
・この委員会はスポーツに関する県外進学に特化しているが、高校入試は全ての生徒に関わるものであり、その視点を忘れてはならない。